

# 学校支援者が伝える 社会に開かれた学びの重要性

地域や大学、企業など、学校外の団体との連携は、生徒を大きく成長させると言われるが、それはなぜなのか。高校生を始め、全国の子どもの学びを支援しているNPO団体の代表に、社会に開かれた学びの重要性について聞いた。

## インタビュー

### 子どもは社会とかかわる中で、 学びを自分事化させていく

認定特定非営利活動法人カタリバ 代表理事 今村久美

#### 被災地で出会った 高校生から学んだこと

今までも、今後の社会は予測困難  
だと言われていましたが、今回の新  
型コロナウイルスの感染拡大を通じ



いまむら・くみ 慶應義塾大学在学中の2001  
年に、高校生のためのキャリア学習プログラム「カ  
タリ場」の活動を始める。以後、10代の子どもが  
主体的に人生を切り拓くための学びを支援。現在、  
文部科学省中央教育審議会委員を務める。

て、それを多くの人が実感したので  
はないでしょうか。答えが1つでは  
ない問題に対して、試行錯誤を繰り  
返しながら、最適解を探り出し、問  
題解決に向けて実際に行動する力を  
育成する大切さを、多くの先生方が  
改めて感じたことと思います。  
そうした力は、学校の中で完結す  
る学びだけで育むことは難しいと、  
私は考えています。子どもにとって  
社会とかかわることは、学び、成長  
することができる貴重な機会です。  
学校と社会がつながり、社会で活動  
している様々な人たちと、子どもを  
一緒に育てていく関係を築くこと  
が、今後はますます必要だと思っ  
ます。それを強く実感するきっかけ

となったのは、東日本大震災で大き  
な被害を受けた岩手県大槌町おつちでの女  
子高校生との出会いでした。

彼女は、被災地支援のために町を  
訪れた人たちとかかわるうちに、「私  
は、地域のために何ができるのか」  
と考えるようになりました。彼女は、  
学校の勉強は得意ではありませんで  
したが、宇宙や星が大好きでした。  
東京を訪れた時に大好きな星が全く  
見えなかった経験から、大槌町の星  
の魅力に改めて気がつきました。そ  
こで、「大槌町の夜空を基に、私が  
宇宙や星の話をしたら、多くの人た  
ちに大槌町の星を見に来てもらえる  
のではないかと。そうしたら、町が元  
気になるかもしれない」と考えまし

#### カタリバの活動 概要

◎大学生スタッフが高校を訪れ、生徒一人ひとりと対話し、将来を考  
えるきっかけを提供するキャリア学習プログラム「カタリ場」を運営する。  
震災の被災地・宮城県女川町おながわ、岩手県大槌町おつち、熊本県益城町ましがきでは、幼  
児から高校生までの学習支援と心のケアを行う放課後学校「コラボ・ス  
クール」を開校した。2013年からは、高校生のための課題解決型学  
習プログラム「マイプロジェクト」を実施。高校生が身の回りの課題や  
関心をテーマに自ら立ち上げたプロジェクトを、各分野の専門家が支援  
する。参加者が活動の成果を発表し、ほかの参加者らと意見交換をす  
る場として、「全国高校生マイプロジェクトアワード」を毎年開催している。

た。彼女は、早速行動に移しました。  
クラウドファンディングで資金を集  
めて望遠鏡を購入し、星空教室を開  
いたのです。思いを実現させた彼女  
と話して、「なんて素敵で学ばせて  
なんだろう」と、私は感動しました。



写真「マイプロジェクト」のウェブサイト。探究学習に伴走するパートナーに登録すると、オンラインのコミュニティへの参加、マイプロジェクトの導入・実践・発表のサポートなどが受けられる。

私が高校生のための課題解決型学習プログラム「マイプロジェクト」を始めたのは、どんな地域にいても、彼女が実践したような学びとそれを通じた成長を、より多くの高校生に体験してほしいと考えたからです。そして、高校の先生方に、学びの場は学校の外にも広がっていることを伝えたいという思いもありました。

### 多様な他者との対話の中で 自己を発見し、変容させていく

「自分が住む町のために何かしたい」と思い、星空教室を開いた彼女は、震災前から社会への関心が高かったわけではありませんでした。私を含めた様々な他者と対話を重ね

る中で、地域への思いが深まり、地域のために自分は何ができるのか、何がしたいのかといった考えが少しずつ明確になっていき、実践へとつながっていききました。つまり、他者との対話には、自己を発見し、自己を変容させる力があるのです。

探究学習では、自分で課題を設定し、自分事としてそれに取り組むことが大切です。ただ、マイプロジェクトの活動を見ていると、最初から「これが自分がやるべきことだ」と自分事化された課題を持つ高校生はほとんどいません。プロジェクトに取り進む過程で出会ったたくさんの人たちと対話を重ねる中で、課題を少しずつ自分事化していくのです。

もちろん、そうして見つけた課題に今は強い関心があっても、将来は変わるかもしれません。でも、それだよと思っています。大切なのは、今、関心のあることに真剣に取り組む中で、新たな気づきを得たり、視野や考えを広げたりすることです。その結果、自分にとってもっと重要な課題を見いだせたのであれば、探究したいことが変わっても、それはむしろ歓迎すべきことだと考えています。ですから、マイプロジェクトでは、ビジネスコンテストのような

高い完成度を求めています。プロジェクトが学びのスパイラルを回す場となり、同じようにプロジェクトに取り組む高校生やプロジェクトを支援するメンターと出会えることをサポートしています。

### 先生自身が一人として 社会に積極的に出ていく

高校生が自分事化できる問題を見つけ、その解決に向けて探究を深めていく上では、高校生の学びに寄り添いながら、気づきを与えてくれる伴走するパートナーの存在が大切です。教師は、その役割を果たす存在ですが、高校生が40人いれば40通りの伴走が必要ですから、教師が一人ひとりの高校生を丁寧に支援することは難しいでしょう。だからこそ、社会の力を借りることが重要になります。企業やNPO団体などの中には、「高校生と一緒に何かに取り組みたい」と考えている人たちが大勢います。市役所の市民協働課などに連携先を相談してみてください。

学校が社会とつながる上では、先生方が一人として積極的に社会とかわかることも大切だと思います。教師が社会に出て、「こんな生徒を

育てたい」という自身の思いを伝えれば、その思いに共感してくれる協力者と出会えるはずです。そして、「この人の生き方や考え方は素晴らしい」と尊敬できる友人を、学校外につくっていくのです。

学校外との連携では、しばしば「依頼する側」と「依頼される側」という一方通行の関係になりがちです。そうした関係では、目線を合わせて一緒に高校生を育てていくのは難しいでしょう。けれども、同じ思いを持つ尊敬できる友人であれば、対等なパートナーとして対話を重ねながら、よりよい教育実践のあり方をもに紡ぎ出すことができると思います。そのためには、まず教師自身が、「自分はどんな生徒を育てたいのか。探究学習でどんな資質・能力を育成しようとしているのか」をしっかりと考え、言語化することが大切です。

社会には、課題意識を持ち、熱い思いで活動している人が大勢います。本気で何かを考え、取り組んでいる人に出会った時、子どもの心は揺さぶられます。そうした人たちと、まずは教師自身がつながり、それを子どもたちにつなげていく。探究学習ではそういった役割が、教師に求められているのだと思います。